

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32206

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381328

研究課題名(和文)聴覚障害児を持つ親への支援プログラムの開発 - 親の自己効力感を高める支援 -

研究課題名(英文)Development of Programs to Support the Parents of Children with Hearing Impairment

研究代表者

原田 浩美 (Harada, Hiromi)

国際医療福祉大学・成田保健医療学部・教授

研究者番号：50599545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、聴覚障害児の言語指導において、個々の親の個性に合わせた心理的・物理的援助をより具体的にできるようにすることであり、児の母親25名に対して、1対1の半構成面接を行い、GSES Testにて自己効力感をTEGにてエゴグラムを測定し、以下を明らかにした。面接結果から抽出した支援に必要な項目は、家族への支援、情報提供と聴覚障害に関する理解促進、罪悪感に対する援助、障害受容の促進、自助グループの紹介、肯定的側面を支える援助、母親の理解程度の早期把握、継続的支援と連携であった。親の自己効力感と児の言語習得、エゴグラムパターンと自己効力感とに、一定の関連は認められなかった。

研究成果の概要(英文)：The present study will also examine parent-related factors by clarifying the influences of parents' sense of accomplishment, self-efficacy, and growth on the language development of children with hearing impairment, with the aim of developing programs to support both children and their parents.

Semi-structured interviews will be individually conducted with 25 parents of children with hearing impairment undergoing training based on the Kanazawa (written/oral) method to clarify their sense of parenting role implementation and personal growth, using self-efficacy and the Ego gram test. During the interviews, the subjects will be asked to freely describe their emotions as parents, and such statements will be recorded. There was no directly related to ego gram, self-efficacy, and children's language ability at time of investigation. Parents of children with no language delays tended specifically have found mental and physical support of their family from the first visit.

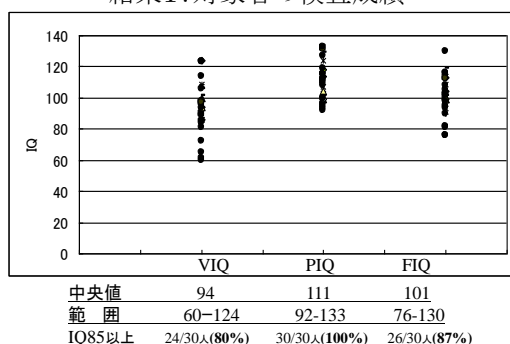
研究分野：言語聴覚障害学

キーワード：聴覚障害児 親支援 自己効力感 半構成面接

## 1. 研究開始当初の背景

我々は、長年にわたり聴覚障害乳幼児に文字言語を重視した言語訓練（文字音声法）を実践する中で、多くの聴覚障害児は、健聴児同様の話し言葉の習得ができ（80%・結果1）、かつ特に持って生まれた知能が高くなくても十分日本語を習得できることを明らかにした。

結果1:対象者の検査成績



しかし、これまでは、十分な言語習得が出来ないことの要因を子ども側に焦点を当てて考えてきたが、親への心理的援助および物理的援助の不足がこの結果をもたらしているのではないかと考え、親側の要因にも焦点を当てて検討することにより、より具体的な支援ができるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 我々の行っている文字音声法は、乳幼児期の訓練は、言語聴覚士による親指導と集団訓練が中心であり、家庭で親が子供と遊びながら進めていくものである。そのため、親の心理的な負担度は大きいと思われるが、わが子の言語習得が進むにつれて、心理的達成感は高くなっていく。この親の心理的達成感と、親の性格特徴との関係、さらには児の言語習得レベルとの関係という観点から検討した先行研究はない。

Bandura によって提唱された Self-Efficacy (自己効力感) とは、ある行為・行動をすること

に対して、その人の遂行可能性や自信感をさしている。①この Self-Efficacy Scale と、エゴグラムにより親の性格特徴を捉え、児の言語習得との関連を比較検討すること、②親へのインタビューから、我が子が聴覚障害と診断された時の親の気持ち、その後の子どもの発達を通して親自身が成長するには、何が必要なかを抽出すること、③抽出した支援項目（親に必要な支援項目）を用いた、チェックリストを作成し、それぞれの親の行動特性に合わせた指導が行えるようになるのではないかと推測している。  
(2) この研究の目的は、子ども側の要因に何ら問題がないにもかかわらず言語習得が順調に進まなかった親側の要因を明らかにし、その要因に対する心理的支援、物理的支援を行うことにより、より多くの聴覚障害児に豊かな言語習得をもたらすことである。

## 3. 研究の方法

(1) インタビュー調査、心理検査、言語発達の聴き取り調査

文字音声法（金沢方式）によって言語指導を受けている聴覚障害児を持つ親に対して、表1に示すインタビューガイドに従い、1対1の半構成面接を実施し、同時に、親としての思いを自由に口述してもらい、記録・録音を行った。

表1. インタビューガイド

1	難聴が発見された時どのようなお気持ちでしたか？
2	その時のご家族の反応は、いかがでしたか？
3	友人や近所の人たちの目は気になりましたか？
4	前向きになれるまで、どのくらいの期間が必要でしたか？
5	どうやって前向きになりましたか？
6	その当時、お仕事はされていましたか？
7	辞めるにあたって、どのような心の動きがありましたか？
8	途中で投げ出さなくなったことはありましたか？
9	そのときをどうやって乗り越えましたか？
10	言語聴覚士にもっと何をしてもらいたいと思いますか？
11	これは言っておきたいと思われることは？

次に、親の Self-Efficacy を GSES Test (General Self-Efficacy Scale) を用いて測定し、

新版 TEG II (Tokyo University Ego gram New Ver. II)にてエゴグラム測定を行った。Self – Efficacy Scale は、段階1 (非常に低い)、段階2 (低い傾向にある)、段階3 (普通)、段階4 (高い傾向にある)、段階5 (非常に高い) の5段階に分けられる。対象者からの聞き取り項目として、児の年齢ごとの獲得語彙数、及び、実施済みの言語検査結果の聞き取りを実施した。

上記の結果から、児のインタビュー当時の年齢、及び言語発達 (健聴児と同等以上が否か) と、母親の自己効力感、エゴグラムとの関連を検討した。なお、調査時点で0歳代の対象については、言語発達を用いる分析からは除いた。

インタビュー結果については、内容を分析し、親への支援項目を示した。

(2) 分析対象者は、①二人 (第1子、第2子とも) の聴覚障害児を育てる母親、②一人の聴覚障害児を育てる母親、③経過中、一年以上の間隔を置き2回の調査協力が得られた母親とした。

### (3) アンケート調査

インタビュー結果の分析から抽出した項目を調査項目としたアンケートを実施した。

## 4. 研究成果

(1) 二人の聴覚障害児を育てる母親への調査は、30代の母親2名に対し、前述の方法により、調査を行った。健常児並みの言語力を獲得している第1子の年齢は、当時、8歳と7歳で普通小学校に在籍中、第2子は、5歳と3歳で言語習得中であるが、順調であった。

母親の自己効力感は段階3と段階2であり、健聴児並みの言語発達を獲得していることと、自己効力感に関連はなかった。

インタビュー結果からは、①第1子が診断された時の気持ちとして、ショック、どん底であった、②その時の家族の反応は、「同じ方向を向

く」というもので、母親を支える体制にあった。③人目は気にせず、あえて自分から発信した、④担当言語聴覚士に、「子どもや自分が褒められるとうれしい」、⑤2人目の難聴が分かった時は、1人目の時と同じかそれ以上に辛かった、⑥罪悪感があった (外へ連れて行く罪悪感、自分が休憩する罪悪感)。

対象毎の特徴として、「前向きになれた」要因に、①先輩の子どもの成長を見て、見通しが明らかになったことや、何をすれば良いのかが分かったこと、②夫が全てに協力を惜しまないことや、夫に「〇〇がきちんと育てているのはお前のおかげだ」と頻繁に言われること。などがあった。その結果から、母親への具体的支援として考慮すべきことは、①家族の支援が重要、②子供の障害を隠さない手助け、③先輩に相談できる (先輩の子どもに会える) 自助グループの存在、④見通しのある具体的な言語指導方法の説明をすることで聴覚障害の特性や理解を促すこと、⑤肯定的側面を支える (良いところを褒める)、⑥罪悪感については、きめ細やかな傾聴により思いに気づくこと、が挙げられた。

(2) 0歳代に難聴が発見され、訓練を開始した母親8名に対し、前述の方法により調査を行った。調査時の児の年齢は、0歳代1名、3~4歳代3名、5~6歳代3名、7歳代1名であった。

母親の自己効力感は、段階1が3歳~6歳の3名、段階2は、7歳の1名、段階3が1歳未満~6歳の3名、段階4が4歳の1名であった。健聴児並みかそれ以上の言語発達を示す児の母の自己効力感は、1から4に散らばっており、同様に、十分な言語発達に追いついていない児の母の自己効力感も1から3に散らばっていたことから、言語発達と、母の自己効力感には関連はなかった。

自己効力感と診断からの経過年数の関連についても、関連は見られなかった。

母親のエゴグラムと言語発達の関係については、母親のエゴグラムは、A 低位型 2 名、W 型 2 名、P 優位型 1 名、NIII 型 1 名、FC 低位型 1 名であり、言語発達との関連は見られなかった。

インタビューでは、健常児と同等以上の言語発達を示した児の母から聞かれたのは、「夫が支えであり、何でも相談でき何でも受け止めてくれる。」「難聴がわかった時、夫は動じず、すぐに情報収集を始めた。」「ST が子供のよいところを褒めてくれるので、安心できる」、などであった。言語発達が十分ではない児の母親から聞かれたのは、「行ったり来たりで、まだ前向きになれない。ST に育児相談をしている。」「まだ乗り越えられない。」「難聴をよく理解していなかった。」「深刻に考えていなかった。」「夫は話をきいてくれないので腹が立つ。」などであった。

母の自己効力感は低い健常児と同等以上の言語発達を示した児の母には、家族の強力なサポートがあったことが、良い影響を及ぼし、母親の障害受容が十分ではなく、前向きに児とかかわることが難しい場合には、マイナスの影響を及ぼすことが示唆された。

聴覚障害児を育てる母親の自己効力感測定には、家族による支えや、障害理解の程度、障害受容の状態などを測定項目にする必要があると考えられた。

母親への具体的支援としてはこれまでの①家族の支援、②障害を隠さない手助け、③自助グループ、④育児支援、⑤情報提供と難聴に関する理解促進、⑥肯定的側面を支える援助、⑦罪悪感に対する援助に加え、⑧育児支援や気づきの促しによる障害受容の促進、⑨母親の障害理解程度の早期把握が必要であることがわかった。

**(3) 聴覚障害児の言語発達成績の群比較を中心として、**母親 14 名に対し、前述の方法で調査を行った。調査時の児の年齢は、0～1 歳代 2 名、3～4 歳代 5 名、5～6 歳代 4 名、学童 3 名であった。

母親の自己効力感と言語発達の関係は、言語発達の評価では、0～1 歳代の 2 名を除いて、聞き取り結果から、健常児同等かそれ以上の以上群と健常児以下の以下群に分けると、以上群 5 名、以下群 7 名であった。

母親の自己効力感は、表 2. に示す通り。

表 2. 一般的自己効力感の得点

自己効力感	1	2	3	4	5	
	0～3 点	4～7 点	8～10 点	11～14 点	15～16 点	
	非常に低い	低い傾向にある	普通	高い傾向にある	非常に高い	
人数 (名)	3	4	4	3	0	
言語発達	健常児と同等以上	6歳	学童, 学童	5歳	4歳	—
	健常児以下	3歳, 4歳	3歳, 4歳	6歳, 学童	6歳	—
	1歳以下			0歳	1歳	

以上群の場合には、6 歳、学童の児を持つ母親の自己効力感が、1～2 にあり、4、5 歳の児をもつ母親が 3～4 にあった。以下群の場合には、3、4 歳の児を持つ母親が、1～2 にあり、6 歳、学童児を持つ母親が、3～4 にあった。0 歳代、1 歳代の児を持つ母親の自己効力感は 3～4 であった。

0～1 歳児の母親が普通～高い傾向を示したことは、児とのやり取りを楽しみながらの生活ができている時期であることが考えられ、3～4 歳児の母親が非常に低い～低い傾向を示したことは、この年齢では、児の言語発達の差が明確になり、親は他児と比較して、焦りなどの感情が出てくるのが関連するのではないかと考えた。6 歳児、学童の母親の自己効力感が言語発達と逆の傾向を示したことは、以上群の母親の目標の高さの表れではないかと推測した。

母親のエゴグラムは、A 低位型 2 名、AC 低位型 1 名、W 型 2 名、NP 優位型 3 名、P 優位型 1 名、N-I 型 1 名、N-II 型 1 名、N-III 型 3 名であり、言語発達との関連は見られなかった。

インタビュー結果からは、両群に共通の反応は、診断時に落ち込み泣き、そこで家族と一緒に頑張ろうと言ってくれたことであった。以上群だけに見られた反応に、難聴児を産んだことを責められたというものがあり、以下群には、難聴が正確に理解できないこと、家族も同様に理解できず、かわいそうだけど何とかかなと思うというものがであった。

また、以下群で、「まだ、前向きとは言えない」と、受容困難な状態が伺えた。両方に共通で、多くの母親が、「先輩のお母さんに支えられて」前向きになれたと述べた。以上群では、「進むべき方向・方針が決まって」前向きになったという反応もあった。ST に望むことでは、以上群で目立った、「褒められてうれしい」は、以下群では無く、「担当者が心細い～良くないことでもきちんと伝えてほしい。」などが語られた。

母親への具体的支援としては、①家族の支援、②自助グループでの支え合い、③継続的支援と自助グループとの連携、④責任と自信を持った指導、⑤肯定的側面を支える援助、⑥罪悪感の緩和、⑦情報提供と障害理解の促進、などが明らかになった。

#### (4) 経過中、一年以上の間隔を置き 2 回の調査協力が得られた母親への調査

2 回の調査協力が得られた母親 3 名に対し、前述の方法で調査を行った。調査時の児の年齢は、例 1 : 4 歳→6 歳 (入学前)、例 2 : 5 歳→学童、例 3 : 学童→学童であった。

自己効力感は、例 1 で段階 4 →段階 2 へと変わった。エゴグラムは、AC 低位型であった。例

2 は、段階 3 のままであり、W 型であった。例 3 も、段階 3 のまま、M 型であった。言語発達については、例 2 が健聴児並みかそれ以上の獲得を示し、例 1 と例 3 が、十分な言語発達に追いついていなかった。

自己効力感、エゴグラムと言語発達に明確な関連は見られなかったが、例 1 については、児の小学校入学を控えた 2 回目の実施で、自己効力感が低下していた。①様々な環境要因を明らかにし、それが及ぼす影響に対する手立てを考える必要があること、②児の年齢ごとの出来事を指標にした多数例における長期的調査が必要であることが示唆された。

インタビュー結果からは、例 3 では、乳幼児期を思い出し、「自分だけが聴こえてしまっている」「2 度と音楽は聴かない」と、自分を責め続けたことを語った。相談しやすい先輩もおり、先輩の子どもを見て見通しも持てたが、なお、その思いが強かった。3 例からわかった母親への具体的支援は、①家族の支援、②障害を隠さない手助け、③自助グループ、④情報提供と難聴に関する理解促進、⑤肯定的側面を支える援助、⑥罪悪感に対する援助、⑦育児支援や気づきの促しによる障害受容の促進、⑧母親の障害理解程度の早期把握が必要、であった。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

① Notoya M., Toyama M., Hashimoto K., Harada H., et al: Auditory and speech-language data in a case of facioscapulohumeral muscular dystrophy in a Japanese child. *International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology Extra*, DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.pedex.2016.11.004>

② 橋本かほる、能登谷晶子、原田浩美、他：新生児聴覚スクリーニング後の療育支援体制に

対する一考察、AUDIOLOGY JAPAN 58、2015、pp.143-150.

③ Kahoru Hashimoto, Masako Notoya, Hiromi Harada, et al: Long-term language abilities of subjects with hearing impairment trained by the written-oral language method, 金沢大学つるま保健学会誌, 査読有, 38, 2014, pp1-10.

④ 能登谷晶子、原田浩美、橋本かほる : 聴覚障害の臨床、言語聴覚研究、査読有、11、2014、pp.91-97.

⑤ 原田浩美、能登谷晶子、橋本かほる、他、: 聴覚障害幼児への文の指導—幼児期に助詞を含む文の習得の可能性について—、音声言語医学、査読有、54、2013、pp.136-144.

DOI: <http://doi.org/10.5112/jilp.54.136>

⑥ 能登谷晶子、原田浩美、橋本かほる、他 : 聴覚障害幼児の文発達支援に関する開発研究—格助詞の習得支援について—、音声言語医学、査読有、54、2013、pp.239-244.

DOI: <http://doi.org/10.5112/jilp.54.239>

[学会発表] (計8件、他)

① Harada H., Notoya M., Hashimoto K, et al. Development of Programs to Support the Parents of Children with Hearing Impairment. 30<sup>th</sup> World Congress of the IALP, City West Hotel Conference & Event Centre. Saggart, Dublin. 21-25 August 2016.

② Notoya M., Harada H., Hashimoto K, Yokogawa M, Sugimoto H, Yoshizaki T. Promotion to the students regarding “hearing disorders”. 30<sup>th</sup> World Congress of the IALP, City West Hotel Conference & Event Centre. Saggart, Dublin. 21-25 August 2016.

③ 原田浩美、能登谷晶子、橋本かほる、他 : 聴覚障害児を持つ親への支援プログラムの開発(0歳代での診断)、第60回日本聴覚医学会、京王プラザホテル、東京都、2015.10.21-23

④ 原田浩美、能登谷晶子、橋本かほる、他 : 自己効力感から見た聴覚障害児を持つ親への支援プログラムの開発(乳幼児期)、第60回日本音声言語医学会、愛知県産業労働センター、名古屋市、2015.10.15-16

⑤ Harada H., Notoya M., Hashimoto K, et al. Development of Programs to Support the Parents of Children with Hearing Impairment. 9<sup>th</sup> Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing, Yihe Hotel, Guangzhou, China. 9-11 October 2015.

⑥ 原田浩美、能登谷晶子、橋本かほる、他 : 聴覚障害児を持つ親への支援プログラムの開発—親へのインタビュー結果から—、第9回日本小児耳鼻咽喉科学会、アクトシティ浜松コンgresセンター、浜松市、2014.6.6-7

⑦ 原田浩美、能登谷晶子、橋本かほる、他自己効力感から見た聴覚障害児を持つ親への支援プログラムの開発、第58回日本音声言語医学会、高知市文化プラザかるぼーと、高知市、2013.10.17-18

⑧ Harada H., Notoya M., Hashimoto K, et al. Kanazawa Method-based long-term study on language development in a child with severe hearing impairment. 29<sup>th</sup> World Congress of the IALP, Lingotto Congress Center Torino, Italy, 25-29, August 2013.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原田 浩美 (HARADA, Hiromi)

国際医療福祉大学・成田保健医療学部・教授  
研究者番号 : 5 0 5 9 9 5 4 5

### (2) 研究分担者

能登谷 晶子 (NOTOYA, Masako)

京都学園大学・健康医療学部・教授  
研究者番号 : 3 0 2 6 2 5 7 0